

序列の仕組みに 入る中学一年生



吉 田 武 雄

はじめに

本誌は五八号で「小学一年生」を特集しました。小学一年生は「生育過程でもきわめて重要な意味をもつ転換点」と考えたからです。

中学一年生も「生育過程で、重要な意味をもつ通過点」といえます。どのような通過点を学校の枠組みの側面に絞って、本県の実情を最大公約数的に見るのが、本稿のねらいです。彼らの内面については本号特集の児玉義明さんや現場の教員の方々の論考からみていただきたいと思えます。

一、標準服・体育着

小学校の卒業式では、卒業生はその学区の中学校の制服を着ている。その姿で記念写真を撮るのが普通である。実は奇異なことであるが、もはや常識のようになって久しい。

私立の中学校が、県下に三校（新潟市に二、長岡市に一）しかなく居住地の中学校へ入学するのが圧倒的多数だからそうやっても矛盾が生じない。

義務教育では制服は強制できないのに、標準服という名で事実上の制服になっている。男子は詰め襟の学生服、女子は紺のスーツ型上着と襷スカートのセットである。そして胸には名札を付ける。小学校でジャンパーや毛糸のジャケットなどをカラフルに着ていた彼らは、まず外形から同じになる。

体育着は第二の制服と言える。学校がデザインしたジャージの体育着は校章と姓名が胸に付き、一年Ⅱ赤、二年Ⅱ青、三年Ⅱ緑というように学年別に色分けする。校舎内で履くズック靴の紐の色も同じ学年カラー（次年度は一年Ⅱ緑、二年Ⅱ赤、三年Ⅱ青と循環）。冬は別として他の季節では登校下校さえジャージ姿で、授業中もこれで通す。これは制服よりはるかに活動的であるという合理性が、きまりや常識に勝っている姿といえる。

小さい学校でも百人余、大規模校は八〇〇人台という生徒を瞬時に識別し、指導するには服装や名札が有効であるのは論をまたない。そこに小学校に比べ服装や内ばきなどが統一されるひとつの根拠がある。

「同じことがよい」という雰囲気は、月曜毎の全校朝礼で、同じ服装で体育館にきちんと整列して、係の

先生に「一年〇組が、いちばん早かった」などと評価されて、いっそう定着する。それに同調できない個性の強い繊細な子どもは、居場所がないと感じても当然で、不登校はその表現である場合が多い。

一、学級・学年

一年生の学級分けは、小学校の6年生担任が中心に行なう。一学年が四学級の中学校なら卒業する児童を四等分する。学力、リーダーの資質、問題行動の有無などを考慮して、誰とだれを一緒にして、誰とだれを離すという具合に分けて中学校の担任予定者に説明して引き継ぐ。

中学校側は、各小学校からの四グループを組み合わせて、新クラスを作る。新クラスと学級担任を組み合わせるが、いずれも抽選によってである。

中学一年のクラス数が多ければ、小学校のクラス数も多いわけで、予想を越えた組合せができるのはやむをえない。親戚やいとこ同士が一緒の学級になるなどは避けがたい。騒がしいクラスとか、おとなしいクラスとか、学習に問題のあるクラスなどができる可能性

が高い。クラスの一割が授業中に騒いだら授業の成立は危うくなる（一年生だけではないが）。

二年生になる時、再びクラス分けして卒業まで二年間同じになる。一年生の学級は一年間だけの付き合いという前提が生徒にも担任にもある。

中学校は、学年ごとの指導が多くの場合で行なわれる。学年集会は、学年の生徒全員が一堂に集まって、服装や勉強や生活の細部まで指導を受ける場になりやすい。例えば放課後の生徒が喫煙しているなど、学区の人から学校へ注意があれば、学年集会が開かれる。生徒指導のこわもてする先生が、いわゆる「説教」をする。小規模の家庭的な小学校から来た生徒たちは面食らうかもしれない。中学校は怖いところと一年生が感じても不思議ではない。

もちろん学年ごとに遠足や野外パーティ等の楽しい行事もある。学級を越えての活動は、横の連帯感を強めるし、友達の間が広がるきっかけも作る。

三、学級担任・教科担任制

小学校は、音楽などわずかな教科を除き、学級担任

がほとんどの授業を行なう。中学校は、教科担任制で数学、理科など教科によって教師が変わる。英語がまったく新しい教科となる。週に国語五、社会、英語は四、数学、理科、保健体育は三、音楽、美術、技術家庭は二の計二八時間の授業と「道徳」と学級活動の各一時間、合計三〇時間に参加する。他に生徒会や学校行事という特別活動が加わり、年間一一九〇時間が課される（五〇分が一単位時間）。

学級担任が、仮に理科教師だったとしても週に三時間の授業と「道徳」と学級活動の二時間、朝と掃りの会の接触が主になる。

教科担任制に不応を起す子どもがいる。だが、じきに慣れて大多数に歓迎される。教師の個性に触れることによる興味・関心であり、教師の専門性に触れる喜びであろう。小学校に比較すれば、算数が数学と変わるようにどの教科も、もっと学問の匂いがするようになる。あるいは画家のような美術教師に出あうこともある。

小学校の五、六年生になれば、学級担任が自分の好みでないという場合も起こり得るし、中学校でも同じ事が言える。しかし学級担任以外の教師と出あう機会

が増えることで、その悩みを減少し得る。

一年生が最も中学の特徴を実感するのは、この多くの教師と授業や部活動、学校行事などで接するときであろう。

しかし教科毎・学年単位で相対評価する仕組みから授業は、ひじょうに個性的なものは許されない。進み具合を打ち合せながら、教科書中心の授業がもっとも無難となる。5段階相対評価は、5と1||七%、4と2||二四%、3||三八%が、基準になっている排他的競争の枠組みである。

このような枠に評定せざるを得ない教師達は、生徒からの不信感に悩まされる。評定をしない養護教諭の保健室は彼らのオアシスになる。

四、学力の競争

一年生は一学期の定期テスト(六月下旬)を受けて学力競争の厳しさを知る。テスト期日を二日間設けて全校一斉にするやり方は初めての体験になる。定期テストは、他に十月初旬、十一月下旬、二月下旬の年四回になる。ここでは学力は授業で学んだことをどれだ

け理解し、記憶しているかが、主に測られる。特に国語、社会、数学、理科、英語の五教科が重視される。これらは公立高校入試試験の教科である(私立高校は国語、数学、英語の三教科)。

他の保健体育、技術・家庭、音楽、美術はもちろん実技が加味されるが、一〇〇点満点の八〇点というように点数で表され、五段階評定の基礎になる。

各学期末には保護者面談が行なわれる。その主な話題は「学年一二〇人中五教科の合計点数で五二番」というように、序列が明らかにされる。生徒はやがてそれを知り、勉強意欲に多きな影響をうける。

高校入試の内申点は、一〇段階評定になるゆえにその基礎となるテストの点数は大切になる。三年生の在籍生徒を教科ごとに一〇のランクに、厳密なパーセントで分けるには点数が頼りになる。一年生からのテストの得点が基礎になる。その意味で一年生の最初のテストからすでに高校入試の競争に入っている。

推薦選抜制が公立高校の三校、四学科を除き今年度は百三校、二百五学科で行なわれ、受験生の三人に一人が受けて募集定員の二八・五%が内定した。推薦の基準には内申点があるレベルを超えていなければなら

ない。学校と学科の数ほど学力の格差があり、それに合わせて「輪切り」といわれるように受験生は振り分けられる。

中学校の学習には一年生から高校入試の束縛を受けている。部活動でもずば抜けた成績をあげれば、推薦入学に有利になる。

五、部活動

今年の四月からは部活動が変わる。今まで全員入部制が多かったのが、希望入部制に移るようだ。それでも部活動は中学校生活の大きな特色であり続けると見られる。彼らの自主的な活動が大幅に許されるし、技術や体力の伸びが実感できるからであろう。

一年生はおよそ四月いっぱい、部活動は見学期間である。放課後、二年、三年の先輩たちがやっている体育系や文化系の活動をみてまわる。適当な時期に生徒会が行なう部活動説明会がある。入部するのは五月としても、彼らは見習いの活動が暫らく続く。施設に対して部員数が多い部ほどそうなる。

例えば野球部は広いグラウンドで、数十人の部員がい

ても、練習は対外試合にでられるレギュラーが中心に行なう。一年生は球拾いやグラウンド整備など補助的な活動が主になる。たしかに身体的にも技術的にもあまりの格差があつて二、三年生と同等の練習は不可能である。

同様なことはブラスバンドなど文化系の活動にも言われる。高価で複雑な楽器など演奏できる迄には、先輩たちの指導が必要である。

部活動は同学年や異学年のメンバーとの関わりの中から人間関係を学ぶいい場である。しかし民主的な運営が行なわれないで、先輩の専制的な支配が黙認されたり、顧問教師が放任状態の部では「いじめ」の温床になりかねない。

一年生の時に入った部に不適應になるケースはすくなくない。部長や顧問教師や学級担任と相談しても解決しない場合は、部を交わることも可能である。ただし受入先の部員が歓迎しなかったり、そこでの人間関係が築けなかったりはおおいにあり得る。一年生には特に慎重な入部の選択が求められる。

新年度から対外試合を目的にせず、楽しむための部ができる。それはむしろ速きに失したが、施設や指導

者が不足の現状を改めないかぎり、子ども達のスポーツや文化的活動の要求に応えることはできない。

一年生は、新しい部活動にどう関わっていくか、これから注目される。

六、生徒会、学校行事

小学校で児童会のリーダーを体験してきた一年生も中学校の生徒会では、部活動と同じく先輩たちの自主的な活動を驚きの目で見る立場になる。

全校生徒が一堂に会して行なう生徒会総会などは、その最たるものである。二、三年生たちの難しい言葉を使つての論議に憧れる。自分たち一年生の発言がどんなに子どもっぽいものかを知る機会になる。

保健委員会、放送委員会などの一年生委員になって上級生達から仕事だけでなく、多くのものを学ぶ。校風といわれるものが引き継がれていく。

体育祭、文化祭、遠足、卒業生を送る会などは、学校が行なうのであるが、生徒会の協力が再大限に引きだされる。一年生はここでも生徒会活動で学んだと同様に伝統的な校風を引き継ぐ。

これらの活動は、内申書に書かれ評価される。ただし高校入試に推薦制が、ほとんどの学校・学科に広げられるようになって、特に中学三年生の活動に変化が生じている。生徒会活動などを推薦入学に有利になるように振る舞う行動である。それは一年生にも微妙な影響を与える。教師の眼を必要以上に気にする中学校生活が、生徒達のストレスをさらに増やしている。

七、まとめにかえて

学校における「いじめ」は、公式に届けられた発事件数は減っているといっても、依然として重要な問題である。学校には「いじめ対策委員会」などが置かれて、そのゼロを目指している。

しかし九四年十二月から四年間に、学校でのいじめを苦に自殺した中学生は三十人。内訳は三年生が十人、二年生が十四人、一年生は六人で、本県は二年生、二人、一年生が一人で一割を占める(注)。その一年生だった伊藤準くんは同級生五人にいじめられていた。二年生の八月に自殺した朝日中の生徒も、一年生の三学期からいじめを受けていた。

中学一年生は、通学距離も学校で過ごす時間も長くなり、活動範囲は大きくなる。新しい学級、クラブ、学年などのなかで新集団を形成する。この時期は特別の対策が必要である。

群馬県教委は、新年度から「WITH YOUプラン」の実施を検討している。中学一年生の学級に二人の教員があたれるように、県単独で百六十人の教員免許をもった支援員を配置する計画である。「中学校は教科ごとに別の教師が指導し、担任と接する機会が少なくなる。それに学習内容も難しくなるのでつまずく生徒が多い。財政難で難しいが、生徒が中学校生活にスムーズにとけ込めるように支援員を活用したい」と（官庁速報、九九年一月一五日）。因みに先にみた中学生の自殺には群馬県は一人もない。

世界的な基準、「子どもの権利条約」に照らすと改革の方向がみえる。子どもの権利条約が日本で、どのように実施されているかを審査した国連・子どもの権利に関する委員会は九八年六月、次のような所見を発表した。

「極度に競争的な教育制度によるストレスのため、子どもが発達上の障害にさらされていること、および、

教育制度が極度に競争的である結果、余暇、スポーツ活動および休息が欠如していることを懸念する。本委員会は、さらに、不登校の数が膨大であることを懸念する」と。

本県の学校嫌いによる不登校は、中学校で二・四六％、二千二百二十五人で、わずかだが増えている(98年)。県教委は、この国連の見解に逆らうことく来年度入試から公立高校普通科(全日制)の通学区域を十学区から八学区へ変えるほか、すべての学区で隣接学区から一定の割合(一〇％～二五％)で越境入学を認める本県初の隣接学区パーセント条項を導入した。いずれも中学生にさらに入試のための極度の競争を強いる変更である。これらに伴う中学校の現状や中学一年生の実情がいつそう明らかになり、改革の合意がひろがることが望まれる。

(注) 伊藤準くんの裁判資料九九年二月二六日から
小誌五七号P 68～71所載

(よしただけお・研究所所員)